

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

---

## Vocabularium Iaponenso-Latinum

田村, 隆  
九州大学大学院人文科学研究院専門研究員

<https://doi.org/10.15017/15089>

---

出版情報 : 文献探究. 46, pp.1-, 2008-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :



# 解 説

田 村 隆

幕末維新期の長崎の地で、おそらくはフランス人宣教師の手によって、本邦初の日本語—ラテン語の辞書が編まれた。近時、九州大学大学院法学研究院教授（当時。現在は名誉教授）の西村重雄氏によって紹介された、“Vocabularium Iaponenso-Latinum”である。洋綴の写本5冊。縦33.0cm、横21.1cm、厚さは各冊2cm程度。氏の執筆になる、九州大学附属図書館報「図書館情報」Vol.39, No.3（2004）の「大学図書館の魅力」によれば、

江戸時代のほんとうの末頃（1867年）、長崎においてJ.M.J.という宣教師によって作成されたと考えられる「日本語—ラテン語（和羅）辞書」の手稿「Vocabularium Iaponenso-Latinum/J.M.J. [請求記号626/P/3]」が附属図書館に所蔵されていたことが分かった。その入手経緯は未詳であるが、こういうものがあるのが古い大学の良さである。

とある。本書は、近年上梓された園田尚弘・若木太一編『辞書遊歩—長崎で辞書を読む—』（九州大学出版会、2004年）を含め、各種の辞書史にはいまだ著録されていない。

附属図書館の受入原簿を確認すると、受入日昭和13年7月5日の項に、

113340 Poirier. Vocabularium Japonenge-Latinum. 1-5.

と見える。ここにはPoirierなる人物が著者と記録されるが、おそらくは第5冊の巻末にある署名によったものであろう。書肆はBunrokudōとある。同様の記述が原簿と併せて保管される文書「図書受入命令（洋）」にも見え、そこには「供給人 文禄堂」とあるから、あるいはかつて長崎市浜町に店を構えていたという古書肆「文禄堂」のことであるかもしれない。

ただし、本書は日羅辞書として新たに編纂されたものではない。口絵に掲げた冒頭部の一葉にも顕著に見られる、“Abouraaghe（油揚）”、“Abouramouchi（油虫）”といったフランス語風の綴り、および掲載語彙の選択と配列から推して、これはパジェス編の『日仏辞書』をそのままラテン語に訳しかえたものと考えられる。例えば、本書のPの項に挙げられた語はPachchito, Pappato, Pararito, Patto, Pichchito, Pinpin, Ponpon, Poppotoと、擬態語・擬音語の8語のみであるが、これらは綴りに至るまで『日仏辞書』と完全に一致する。『日仏辞書』の初版は1862-1868年刊、再版は1868年刊であるから、時期から考えると初版を参照した可能性が高い。

「アンケイ 暗景」の如くラテン語見出しの脇に付された漢字がAの項のみで中止したり、あるいはFの項が『日仏辞書』掲載のFa, Faba, Fabacari以下82頁分をとばしてFouから突如始まるなど、辞書としてはいまだ不完全な状態で、草稿本的な性格を残す。また、成立事情については、古賀十二郎『長崎洋学史』（長崎文献社、1966-1968年）などに紹介される長崎の宣教師プチジャン（Petitjean, Bernard Thadée）の関与も想像される。本書成立のわずか2年後にプチジャンが関わって刊行された『羅日辞書』（『ラホ日辞典』からの「羅日」部分の抄出）や、長崎羅典語学校編『A B C D 羅典語入門』（1881年）との関連など、尚考えるべき問題は多い。

（付記）調査の過程で迫野虔徳先生に多くの御指教を賜りました。御礼申し上げます。

（たむら たかし・本学専門研究員）